三木紀人全訳注「徒然草(二)」講談社学術文庫 1982 年 4 月 10 日刊を読む

第92段　ある人、弓射る事を習ふに

ある人、弓射る事を習ふに、双矢をたばさみて的に向ふ。師の云はく、「初心の人、二つの矢を持つ事なかれ。後の矢を頼みて、始めの矢に等閑の心あり。毎度ただ得失なく、この一矢に定むべしと思へ」と云ふ。わづかに二つの矢、師の前にて一つをおろかにせんと思はんや。懈怠の心、みづから知らずといへども、師これを知る。このいましめ、万事にわたるべし。

道を学する人、夕には朝あらん事を思ひ、朝には夕あらんことを思ひて、かさねてねんごろに修せんことを期す。況んや、一刹那のうちにおいて、懈怠の心ある事を知らんや。何ぞ、ただ今の一念において、ただちにする事のはなはだ難き。

<現代語訳>

ある人が弓を射ることを習うのに、二本の矢を手にして的に向かった。すると、その師が「初心者は、二本の矢を持ってはならない。後の矢をあてにして、初めの矢にを射る時に油断が生ずるからだ。毎回、失敗せずに、この矢一本でかならず充てようと思え」と言った。わずか二本の矢しか持たず、しかも師匠の前で彼が一本の矢をおろそかにするつもりはあるまい。しかし、二本の矢に現われた心のゆるみは、本人は気付かなくても、師匠がそれを洞察したのである。この教訓は万事に通おるものであろう。

仏道を学ぶ人は、夕方には翌朝を思い、その朝になると夕方を思って、その時にあらためてじっくり修行しようと心に期するものである。こうした人は、まして一瞬のうちに心に潜む油断を意識できるだろうか。その事を思い立った瞬間にすぐに実践するということは、なんとむずかしいことだろう。

P.212 ～ 213

［コメント］

兼好の言う通り、一殺那における懈怠の心をどう知り、●●●課題と考える。

－ 2009 年 8 月 8 日林明夫記－